

象のこと、③ 主として家族メンバーだけに限っていること、④ 月に1回程度と間隔が長いことなどが特徴である。

これらのうち、病棟開催のプログラムについてその中間の結果としては、家族のプログラムの参加の有無で入院率、退院率に差はなく、1年半の経過では心理教育的な家族へのアプローチのプログラムは入退院に関してはあまり影響を持っていなかったが、長期入院者の主流は施設への退院であり、このことがその原因と考えられた。

プログラムに参加した家族のEE (expressed emotion) について FMSS (five minutes speech sample) で評価した。そのうち high EE と評価された家族の2名が病状悪化、再入院をしており、EE と病状の関連を示唆する結果が得られている。

4) 神経症者の森田療法絶対臥褥下における直腸温サーカディアンリズムの変化について

野村 和広・豊田 隆雄 (田宮病院精神科)
 松本 晃明・田宮 崇 (市立島田市民病院精神神経科)
 川口 浩司 (浜松医科大学精神神経科)
 大原健士郎 (精神神経科)

男子神経症者14名(20~34歳)、対照群として健常男子6名(20~28歳)を対象として、森田療法の絶対臥褥期を7日間施行し、絶対臥褥下の直腸温を連続測定した。

絶対臥褥期の第1日目から第6日目について、朝8時00分から翌朝8時00分までの24時間の実測値をコサイナー法によってコサイン・カーブに近似し、求めたコサイン・カーブの振幅、周期、位相差、平均体温(Mesor)、極小点(最低体温)の出現時刻、極小値(最低体温)について検討した。その結果、絶対臥褥下においては、神経症群では対照群に比べて、体温変動の極小点(最低体温)の出現時刻が有意に早くなっており、かつこの傾向は病型別では強迫神経症群よりも不安神経症群において顕著であった。このことから、不安神経症者の一群には体温のリズムが前方に変位している者がおり、病的・持続的な不安という情動の変化が体温リズムを前方変位させる要因の一つである可能性が示唆された。

5) 強迫性障害の臨床特徴について

加藤 佳彦・飯田 眞 (新潟県立悠久荘新潟大学精神科)

強迫性障害の子後研究を開始したが、予備調査として対象者の臨床的特徴を調べた。対象となった患者は、1980

年から1989年までの10年間に新大病院精神科を初診し、ICD-10(1988年草稿)で強迫性障害と診断された134例である。

〈結果〉

性別では男性72例、女性は62例であった。発症年齢は、男性は6歳から61歳にわたり平均23.2歳であり、また女性は6歳から65歳にわたり、平均23.7歳であった。婚姻状況については男性の既婚者は72例中27名、女性は62例中28名である。同胞順位では134例中独子が6例、第1子が60例、第2子以下が64例であり、そのうち末子が37例、不明は4例であった。発症の契機に関しては、134例中51%になんらかの契機が認められた。また症状については、強迫症状を強迫行為、強迫観念にとわけたが、134例中強迫行為を示すものが85例で63.4%を占めた。

〈考察〉

強迫性障害の性差については男性の方が多数とするものが多いが、一方で女性の方が多くと述べているものがある。我々のデータでは男性が54%を占め男性の方が多かった。発症年齢の性差については、25歳から34歳の年齢層では女性の発症が多く、それ以外の年齢層では男性の発症が多い傾向がみられた。また、発症年齢の分布では、10代、20代の発症が多いが、40歳までの発症をあわせると79%を占めており、本症が一般的に言われている10~40歳の中年期以前に初発するという説を肯定する所見であった。婚姻状況について、作田はHareらの研究を紹介しながら、結婚生活の面からも強迫性障害の患者は1人1人の家庭生活に大きな支障を及ぼしていると述べている。我々の調査では、全体を対象とした場合には未婚者が多い傾向があるが、35歳以上に対象をしぼるとほぼ100%既婚者であり、結婚する上で強迫性障害者故の大きな支障が明らかには認められなかった。同胞順位に関して成田は、特に男性例で両親からの問題ある養育態度の影響を過保護、過干渉というかたちでこもりやすい長子、末子が多いと述べている。我々の調査では、男性の場合72例中独子0例、第1子34例というように独子第1子が多い傾向はみられず、この点では他の研究と大きな違いをみせている。発症の契機については、今回おおまかな8つの分類を行ったため、男性例は職場内の問題、女性例では家庭内の問題、その他の身体異常が多いという結果のみに留まったが、今後さらに細かい発症契機に分類して検討してゆきたい。強迫症状については強迫行為、強迫観念に分けたが、年齢的な差異は明確でなく、また性差についても明確ではなかった。今後さら